

# 薬草はどこにでもあるんじゃけ 調べて食べて元気になったら、 次は普及活動よね。

栽培中の薬草「アマドコロ」を見せてくれた。  
ほかにもキウイやブルーベリーなどの無農  
薬栽培を行っている



国重さんのパソコンには、薬草に関するデータがぎっしり！「50年前と今の野菜の栄養素を比べると、圧倒的にミネラル不足。同じホウレンソウでも栄養価が低下しているんです。また農業の使い過ぎも顕著です。薬草の中でも、スピナやヨモギは、人間の体に必要不可欠なミネラルが多く含まれているので注目してほしい」と教えてくれた。最近では、無農薬野菜や薬草に関心がある子育て世代の母親たちからの問い合わせも多いそうだ。

「薬草の効能を生かした商品を作り、まずは試して、健康に寄与できるなら販売もしたい」。これからも、薬草にのめり込むきっかけとなった「食べる薬草で健康産業を起す」という思いを胸に、自分の健康、周囲の健康を願って活動を続けていく。国重さんにいただいたメナモミの葉ジュースにしてみよう！

## みんなの健康を願い、商品化を目指す



「戦国時代には、戦でできた切り傷の手当てに使われるなど、長く愛されてきた薬草。今では、「薬草弁当」を提供するホテルがあるくらい、人の生活に浸透してきています」と教えてくれた

三原  
LOVE MEDICINAL  
HERB!  
KUNISHIGE YUKIHIRO



くにしげゆきひろ  
国重幸宏さん

1944年三原市生まれ。2004年に三菱重工を退職し、さまざまな趣味にチャレンジしていたが、母親の農業を手伝ううちに、薬草の魅力に取りつかれる。2009年に薬草研究会発足。薬草の魅力を広め利益にもつなげたいと、2018年にふでかげ山元気村を発足。同代表を務めている。

「薬草にはまってグループを作って活動している人が三原にいる」というわきを聞きつけ、興味津々で電話をかけてきた。「薬草の知識を生かして商品化を考えています。作ったのを見せてあげようよ」。薬草で何を作ったんだろう？ 魔法がグツグツ煮えた鍋をかき回すシーンしか浮かばないが、ひとまず待ち合わせ場所に行ってみることにした。

## さまざまな薬草が身近に

笑顔で迎えてくれたのは、ふでかげ山元気村代表の国重幸宏さん。「年齢？ 67歳。いや、76歳」とおどける明るい人だ。大手企業を退職後は、釣りやスキューバダイビング、尺八とさまざまな趣味を楽しんでいたそう。では、なぜ薬草に？

生まれた地でもある三原市登町や、その隣の須波町は、かつてはミカン栽培で栄えた地。国重さんは母親の農業を手伝ううちに「ミカンに代わる特産品で町おこし」を考えたようになった。

そんな折、崇城大学（熊本県）で薬用植物を研究する村上光太郎さんの「食べる薬草で健康産業を起す」という講義を聞いたことが大きな転機に。薬草は「食べ続けることで、不老長寿を目指すもの」「加工したら食べられるもの」「薬として病気のときに服用するがリスクもあるもの」という、大きく3つに分けられ、特に「食べ続けることで、

## 魔法ではなく、本物の「薬草使い」

そこで、まずは「薬草研究会」を立ち上げ、薬草を採取し本で調べたり、実際に試食したりして知識を深めた。友人に薬草を勧め、体の変化などの感想を集めるうちに、薬草の良さに自信が付いた。2008年、薬草のさらなる研究と普及を目指し、ふでかげ山元気村」を発足。現在、三原市内の13人が所属している。月一回例会を開催し、情報交換や薬草を試食試飲して、薬草の商品化を考えているところだ。

現在注目している薬草は「メナモミ」「ウマブドウ」「アマドコロ」などで、実際に畑で栽培もしている。国重さんは、本物の「薬草使い」なのだ。



ウマブドウは、疲労回復やリウマチ、花粉症、肌にも良いとされている。左下は、ウマブドウの実の焼酎漬け1年もの

## SPOT DATA

須波コミュニティセンター  
☎080-1933-1532(国重さん)

△三原市須波 1-22-2  
※収穫体験や会の詳細は国重さんまで



10月下旬に葉田ゴボウ&もみじフルーツ（赤いキウイ）の収穫体験を計画中!



愛してるぜ!  
**must have!**  
液肥

古来から土着する光合成細菌にも注目し、光合成細菌を使った液肥も作っている。この肥料を散布して薬草栽培を行っているというから驚き